



## 6 松江フォーラム参加記

「自然再生事業と市民活動 - 霞ヶ浦・琵琶湖・宍道湖・中海 - 」に参加して

島根大学生物資源科学部 相崎守弘

当会パートナーシップ委員会の企画として、2002年11月2日～3日に島根県松江市で開催されたフォーラム「自然再生事業と市民活動」に現地実行委員として参加した。このフォーラムは、霞ヶ浦、琵琶湖及び宍道湖・中海で自然再生のため市民の立場で活躍されている3氏から話を伺い、市民レベルでの取り組みのノウハウ、あるいは活動を行う上での悩みや問題点、将来像などについて討議することを目的として行われた。

3日のフォーラム開催に先立ち、2日に宍道湖西岸で行われている湖岸再生事業についての現地見学会が行われ、約50名の参加があった。当日はあいにくの天気であったが見学会が行われた午後には雨も上がり、現地に降り立っての見学が出来た。この湖岸再生事業は鳥取県西部地震の宍道湖岸緊急災害復旧工事として国土交通省出雲工事事務所により行われた事業で、西岸約6.8kmにわたり植生湖岸が再生されていた。工事終了後あまり時間が経過していないことから植物が繁茂している状態からはほど遠かったが、従来のコンクリート製垂直湖岸に比べて親水性が増し、また推移帯の復活も望める構造になっていた。この事業では「斐伊川くらぶ」が発案した竹ポットによるヨシの植栽が特徴となっており、この活動については3日のフォーラムで飯田氏より詳しい説明があった。

3日のフォーラムは松江テルサを会場として約80名の参加があった。午前の部ではまず、NPO法人アサザ基金理事長、飯島博氏から霞ヶ浦を中心として行われている「アサザプロジェクト」の概要、さらに範囲を広げた「渡良瀬未来プロジェクト」などについて話された。続いて、琵琶湖自然環境ネットワーク代表の寺川庄蔵氏から「琵琶湖におけるレジャー規制と市民の実験」というタイトルで、この10月に成立した「琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の抱えている問題と、市民がつくる琵琶湖レジャー規制条例案の取り組

みについて報告された。最後にNPO法人斐伊川流域環境ネットワーク(通称「斐伊川くらぶ」)事務局長の飯田幸一氏から斐伊川くらぶ設立の経緯と活動内容及び竹ポットで特許を取得した経緯などが話された。

午後からはパートナーシップ委員会メンバーも加わりパネル討論会が國井秀伸委員長を座長として開催された。そこでは、会場からの質問に答える形で、会の財政や事務局員の数、どのようにして専門家をパートナーとして取り込んでいけばいいのか、学校で行う環境教育との関わり方など多岐にわたる議論がなされた。このフォーラムの講演内容やパネル討論会での議論については後日報告書としてまとめられ配布される予定です。

行政、NPO、研究者、住民、企業などこれまで結びつきの少なかった各主体が連携を取り合っ環境保全をめざすパートナーシップは、環境基本計画にも盛り込まれ、21世紀のめざすべき方向として定着しつつある。その1つの現れとして自然再生推進法では自然再生のために、従来の行政主体の事業ではなく、NPO法人や専門家も加わった新たな取り組み方が組み込まれている。しかしながら、まだ十分に市民活動が成熟していない今日、パートナーシップを中心とした運営には多くの問題が発生しそうな雰囲気である。事業の主体となるNPOをどのような基準で誰が選ぶのか? 飯島氏の発表ではこのような問題点も指摘され、今後の展開に向けてさらに検討していくべき課題が山積みされていることが認識された。また、専門家の関わり方として、調整役として中立の立場をとるのか、事業推進の立場から特定のNPOと組んで事業化をめざすのか、いろいろ考えさせられるフォーラムであった。とにかく、行政や専門家に対して説得力のある提案が出来るよう、市民活動のレベルを高め、実力のあるNPOを育てていくことが重要であると感じられた。

### 3 理事会報告

2002年12月24日(土)に第20回理事会が開催され、2003年度の活動方針、各委員会からの報告などを審議しました。以下に議事の内容を報告します。

〔第20回理事会議事要旨〕

日時：2002年12月24日(土)14:00～15:30

場所：麹町会議室

出席者：廣瀬、山岸、小倉、井上、楠田、小林、  
角野

#### 1) 第7回大会について

第7回大会は福岡で開催し、日程は10月3～5日とする。会場は九州国際大学の予定で調整する。

公開シンポジウムについては、國井理事に調整を進めていただいております。招聘はオーストラリアからとする。現在候補者にグリフィス大学のStuart Bunn氏が挙がっている。年明けに決定する予定である。

#### 2) 普及委員会

(1)2003年度の企画として「釧路湿原自然再生セミナー」(自然再生シリーズの第二弾。実施予定時期：2003年6月20日～21日。実施予定場所：釧路)を調整中である。現在講演者の内諾は概ね得られているとの報告があり、実施の方向で進める。

(2)五ヶ年計画の総括については、委員長責任でまとめて欲しい。

#### 3) 交流委員会

(1)海外派遣については2002年度は応募がなかったが、2003年度は一応現規程どおりに公募する。公募の周知徹底に務め、会員外にも会員になることを条件に広報する。なお、応募がなかった場合には、交流委員会および理事会で協議する。派遣先の候補については理事等から情報収集する。また、2004年度から海外事情の調査のための派遣についても今後検討する。

(2)会誌の英語版の創設という提案については、今

後編集委員会で議論してもらおう。

(3)韓国との交流については、2004年度の公開シンポジウムや大会への韓国からの招聘の方向については了解するが、ジョイントでシンポジウムなどを行うことについては、交流先として韓国に限るのではなく、アジア全域を指向することが望ましいことから、今後学会全体で慎重に検討する。

(4)他分野との学术交流をさらに推進する方策としての、会員によるミニワークショップなどの開催については基本的にはどんどん進めて欲しいが、予算も含めて進め方等(主催・共催・後援など)については、企画が具体化した時点で理事会に報告、相談する。

(5)交流委員会から要望高い学会のパンフレットについては、簡易版でもいいので作っておくことが望ましい。例えばパソコン上のファイルで作っておき、必要に応じてプリントするようにすれば、費用も抑えられる。角野幹事長を中心に進めて欲しい。

#### 4) 研究開発委員会

奨励研究のあり方、学会による業務受託のあり方やニーズについては、会員にアンケート調査するなどして、委員会で調査・検討を推進して欲しい。

#### 5) パートナーシップ委員会

2002年のフォーラムの成果などを受けて、2003年4月頃に委員会を開き、2003年度の企画やパートナーシップ会員のような制度のあり方について検討して欲しい。水環境交流会のような組織とのタイアップなどについても検討し、NPOにもいろんなレベルのものがあることを考慮して、応用生態工学会として何ができるのかを議論して欲しい。

#### 6) その他

(1)これまでの基礎講座等の成果をまとめて応用生態工学のシリーズの形で出版等ができるかどうかについては、幹事にまかせるので検討して欲しい。できるだけ異分野、異業種を意識したものがよいだろう。

- (2)各地域での事業等については、楠田理事から提案のあった九州でのシリーズ講習会とセミナーの企画については、主催または共催で進めて欲しい。また、東北での企画については、東北地域の会員等と連絡し、当面事務局レベルで進め方を検討して欲しい。
- (3)第21回理事会は2003年6月14日(土)の14:00から開催する。

#### 4 役員候補選考制度検討委員会報告

応用生態工学会では、これまで役員(会長・副会長・理事)については「次期役員候補者選考委員会」を設置して候補を選考し、総会で選出するなどしてきましたが、候補についてもより透明性を確保するとの観点から、「次期役員候補選考制度」を定めることを目的として、検討委員会が開催されました。

本委員会はその設置が第19回理事会において承認されたもので、会長、副会長、理事2名からなる委員会が2002年12月24日に開催されました。第21回理事会で2003年度からの試行が審議される予定となっています。

下記に本委員会で策定された役員候補選考制度の案を示します。なお、委員会では、本制度は近い将来の会員による直接選挙制度の実施までの暫定的なものとなるものであるとの意見も出されています。

##### 〔委員会の日程等〕

日時：2002年12月24日(土)14:00～15:30

場所：麴町会議室

出席者：廣瀬、山岸、小倉、小林

##### 〔役員候補選考制度(案)〕

###### (1)制度の対象

本制度で候補を募る対象は、会長(1名)、副会長(3名)とする。

理事候補については、次年度以降制度の拡充を検討することとし、当面従来どおりとする(8参照)。

###### (2)候補

候補は、自薦・他薦を問わない。正会員5名以上の推薦人の名簿を添えて届け出るものとする。

###### (3)期間

本制度に基づき候補を募る期間は、役員改選年の7月1日から8月31日(または総会の3ヶ月前～1ヶ月前)とする。

###### (4)届出の様式

候補者の氏名及び推薦人名簿等は所定の様式で学会事務局まで届け出るものとする。

###### (5)推薦委員会

候補を募る期間中に届出がない、または定員に満たない場合は、推薦委員会を設置して候補を選考する。

本委員会は、現会長・副会長および会長が指名する2名の理事からなるものとする。

本委員会は、立候補・推薦期間後～総会までに開催する。

###### (6)総会での選出

総会では、候補となったもののなかから、会長・副会長を選出する。候補者が複数の場合は総会出席者による投票を行うものとする。

###### (7)広報

候補を募る方法等については、所定の期間までにニュースレターで会員に連絡する。また、学会ホームページに案内を掲載し、一般に公開する。

###### (8)次期理事候補

次期理事候補については、「候補推薦委員会(仮称)」で候補を選考する。

## 5 交流委員会報告

前記の理事会に先立って2002年12月17日に、応用生態工学会の今後の交流(会員同士また他分野との学術的な交流)について、交流委員会(委員長辻本理事)で議論が行われました。以下にその議事概要を報告します。

日 時：2002年12月17日 13:30～16:30

場 所：麹町会議室

出席者：辻本委員長、浅枝、清野、安田、西

### 1) 地域ワークショップ

交流委員会は地域に交流の場を立ち上げることも目指しており、今年度は北陸でワークショップを実施する。北陸地域には題材がたくさんあり、継続的なワークショップの実施を交流委員会では後押ししたい。水産学関係との交流の場にもできるかも知れない。

### 2) 海外招聘について

海外招聘は理事会が所掌する事項であるが、招聘者からの「希望があれば視察・見学等の受け入れは可能」との申し出を受けて、これをきっかけに国際的な交流として発展・継続させていくこと、特に視察会の企画等について以下のような意見が出された。

- (1) 視察は民間会社の人が興味を持つと思うが、昨今の経済的状況では応募は少ないかも知れない。
- (2) 学会による企画・実行はすぐには難しいだろう。
- (3) 他の組織の実施状況等資料集めはやってもよいかも知れない。

### 3) 五ヶ年計画の総括

- ・交流委員会は、官・学・民、生態学・土木工学の連携などについてはワークショップ、シンポジウムなどで、国際交流については海外派遣(若手、技術者)という形で交流に務めてきた。
- ・総括は、当初の目標を示し、実績を整理して、それが目標のどれに関連しているか明示して、達成度を示すことで行う。
- ・シンポジウムや講座など、普及なのか交流なの

かがあいまいなものは、括弧書きで「\*\*委員会とも関連する」と整理する。

- ・交流の結果、どのような分野の会員が増えたかということも検討する。
- ・達成できなかったことの原因を分析し、解決策を検討して提案する。

### 4) 海外派遣について

2002年度の応募がなかったことも含め、あまり活発でなかったことの原因が以下のように分析された。

- (1) 個人の発表よりも、海外の第一人者などに接触することで拡がり求めてきた。
  - (2) 学会発表の支援ではなく、若手、技術者によるレポーター派遣であった。
  - (3) 支給額が中途半端なため、かえって動きにくいのではないか。
  - (4) 技術者は景気が悪くなったため、行く人がほとんど出てこない。
  - (5) 適切なテーマ設定が難しい。限定された分野の例しか挙げられないことが多い。
  - (6) 若手研究者は、業績に直結する特化した学会への参加を優先し、複合した学会は業績になりにくいので、あまり興味を持たないのかも知れない。
  - (7) 一般の人に、レポートを書いてくださいというのは負担になるのではないか。
  - (8) 理事・幹事等が参加するものと日程がうまく合わないこともあったのではないか。
  - (9) 制度に関する情報が浸透していないからではないか。
  - (10) 関係者が学生などを行かせるのはお手盛りだとの批判を受けそうで、遠慮していたのではないか。
- ・これからの方針として以下のような意見が出された。
- (1) セッションに参加して情報を持って帰ってもらうのが、会の役に立ち、派遣者にも有意義で、やはり複合した領域の行事に行く人を求めることが基本。

- (2) 学生・院生が、自費で行くよりも「レポーターの仕事」としてでも行くことが考えられ、ニーズはあるのではないか。
- (3) 交流委員等の派遣の趣旨を理解している人を派遣する方がむしろいいのかも知れない。
- (4) まわりに行く人がいないか理事や幹事に留意してもらうことが必要ではないか。(派遣者の)ターゲットを絞って行ってもらうこともよしとしてはどうか。
- (5) 学会等だけでなく、「事例収集」や「研修」も対象にしてはどうか。やや難しいかも知れないが。
- (6) レポーター派遣であることをもう少し派遣要綱で明確化してはどうか。

また 2003 年度の方針としては以下のような意見が出された。

- (1) 来年度はもう少し周知を徹底して、もう一度やってみる。その上で再度検討する。
- (2) 会員になることが条件とした上で、メーリングリストや関連する学会にも募集情報を流すのもいいのではないか。
- (3) 2003 年度については、公募は行い、応募がなければ韓国との交流などに使うことも考えられる。
- (4) 理事・幹事などから早期に来年度の国際学会等の行事予定について情報を事務局に集める。1月はじめを目標とする。
- (5) 候補となることを提示するが、そのほかでも応用生態工学の総合的な題目にあったものならかまわないとする。
- (6) 派遣先候補の情報をホームページに蓄積し、周知を図る。
- (7) 公募期間は4月までとする(夏休み中の派遣を視野に入れる)。
- (8) 次号のニュースレターおよびその他の方法で広報する。4月すぎて応募がないときには、派遣先を絞って(韓国など)再度募集するという事も議論する。

#### 5) 交流のための学会パンフレット

内容を盛り込みすぎず、A3 見開きぐらいのものが望ましい。また、載せるものは、理事会等で合意された文書等とする。

#### 6) 会誌英語版について

- ・ 交流委員会は、学术交流に大きなウエイトを置いているが、技術者交流という面からみると、現在の会誌の状態は若干中途半端であるという考え方を持っているとの意見を述べておきたい。
- ・ もっと海外に出て行くのか、国内に腰をすえるのかで作戦が変わってくるだろう。
- ・ 次のステップとしては、国際誌であろう。そこにアカデミックな部分を持たせると、日本版が楽になるだろう。技術者にとっても読めるし、役に立つものとなるだろう。
- ・ 応用生態工学的な分野での国際誌は Regulated Rivers だけである。かなり生物寄りの雑誌でもあり、もう少し複合的なものはないと言えるので、今がチャンスかも知れない。

#### 7) 韓国との交流(INTECOL-Korea をきっかけとして)

- ・ 交流委員会としては、韓国との交流は2003年はボランティアにやっていただきたい(学会は「後援」という立場をとる)。ただし交流委員はできるだけそれに参加して交流を図る。
- ・ 交流委員会がイニシアチブを取って、秋に韓国でジョイントセミナーをやることなどを提案したい。この2度の交流を通じて、組織同士の合意を固めていけばよいのではないか。秋のセミナーが可能ならば、学会からの講師の派遣も検討する必要が生じるかも知れない。この場合、韓国なら往復6万円くらいなので、例年海外派遣に計上する予算でも5名を送り込むことが可能ではある。
- ・ 韓国側の組織化が不十分であれば、数年の間に進めてもらうよう依頼することも可能。
- ・ これを踏まえて、2004年の海外招聘・公開シンポが「アジア」がターゲットになっているので、韓国から数名をゲストスピーカー・パネラーで

招く、研究発表会にも参加してもらうことも可能だろう。2004年大会で韓国とのジョイントシンポジウムを行うというシナリオもあるだろう。

#### 8) 第3回世界水フォーラム

- ・応用生態工学会としても、交流委員会で引き続きコミットするのがよいだろう。
- ・吉野川を上流から下流までみるエクスカージョンの企画もある。これも含め他にも役員が関係するなどのセッションがあるはずなので、情報提供・紹介を行ってはどうか。

#### 9) 学術交流について

- ・これまで応用生態工学会とあまり交流のなかった分野としては、陸水では湖沼、衛生工学(化学)、河川の物質循環、河口、水産、海岸、林学・森林などであろう。
- ・応用生態工学は水にからんだことだけではないはずなのだが、交流は少なかった。原因はいろいろ考えられるが、交流委員会としては以下の活動を考えて行ってはどうか。

(1) 沿岸環境関連学会連絡協議会などとの共催シンポジウムなどを検討する。

(2) 大学の講義で非常勤講師を呼んでくることに似たような、オープンで小さなワークショップを、あまり構えないで数多くやってはどうか。共催でもいい。これを会誌で特集などをやる前に実施すれば情報収集もできる。

(3) より化学的なエコロジーの問題をとりあげてもよいだろう。

(4) 個人的に、行政や民間団体との活動のなかで、さまざまなイベントを開催してきているが、これらの中には学会と関連づけられるものも多々ある。今後、これらを学会の後援イベントとしても位置づけられるようにしていきたい。

## 6 2003年度国際交流海外学会等への派遣者募集開始!

応用生態工学会・交流委員会(辻本哲郎委員長)では、2002年度の海外学会等派遣者の募集を開始しますので、下記募集要領に基づき事務局まで申込下さい。

### 【海外学会等への派遣者募集要領】

#### 1) 目的:

自然環境と開発の問題については、我が国だけに限らず多くの国々で関心が持たれ、様々な研究と実践的な試みが行われて来ている。

応用生態工学を発展させるためには、こうした海外での活動に積極的に係わり参加することによって、情報を得、人的交流を図ることが求められている。

応用生態工学会では、ここに会員から希望者を募り、「派遣研究員」を審査選考して、海外で開催される関連学会・シンポジウム・国際会議等に派遣し、その内容を全会員に報告するものである。

#### 2) 派遣関連学会等:

2003年度に海外で開催される応用生態工学に関連する学会・シンポジウム・会議等で、以下役員等から得た情報をお知らせいたします。これらは、いずれも応用生態工学に関連するものです。応募するにあたって、これら以外の会議等である場合、開催団体および開催内容がどのように応用生態工学と関連するか言及して下さい。

なお、これら以外の関連学会等については、新しい情報が入り次第ホームページに掲載します。

#### 派遣候補1

名称: 第6回国際景観生態学連合世界大会 (IALE2003)

開催期間: 2003年7月13~17日

開催地: オーストラリア・ダーウィン

内容: 景観生態学の分野、総合的な科学としての位置づけなど

詳細情報: <http://www.iale.ntu.edu.au>

### 派遣候補 2

名称：ESA(アメリカ生態学会)と ISEM-NA(国際生態モデリング学会北米)の合同年会

開催期間：2003年8月3～8日

開催地：米国ジョージア州サバナ

内容：「上流から下流へ：地球規模変動時代の海岸過程」気候変動や海面上昇が沿岸生態系に与える影響や、河川流域と沿岸の関係等

詳細情報：<http://www.esa.org/savannah/>

### 派遣候補 3

名称：第9回河川研究と応用に関する国際会議(旧制御河川国際シンポジウム)

Ninth International Conference on River Research and Applications

開催期間：2003年7月6～11日

開催地：オーストラリア，ニューサウスウェールズ・オルベリー

内容：「河川システムの変動特性(The Nature of Variability in River Systems)」

詳細情報：<http://www.conlog.com.au/nisors> または応用生態工学会ニュースレター19号参照

### 派遣候補 4

名称：国際IFIMユーザーワークショップ

開催期間：2003年6月2～5日

開催地：米国コロラド州フォートコリンズ

内容：IFIMに関する、生物学、水理学、ケーススタディ、制度、実例などの話題

詳細情報：応用生態工学研究会ニュースレター18号参照

### 派遣候補 5

名称：NABS2003(North American Benthological Society)

開催期間：2003年5月27～31日

開催地：米国ジョージア州 Athens

内容：淡水生態系保全のための科学、NGOの見解、生物アセスメントでの生態系機能の取り扱いなど多様な話題。

詳細情報：<http://www.benthos.org/>

### 3) 選考基準：(申請書類より判断)

(1) 資格 = 応用生態工学会の正・学生会員であること(募集開始時点で会員でなくても、会員となることを条件として応募可能とする。) 応用生態工学に興味を持つ学生あるいは35歳未満の大学・研究機関研究者、技術者。

(2) 適性を判断する項目

派遣対象となる会議のテーマと本人のバックグラウンド(研究・調査経験)の合致性

派遣対象となる会議で何を学ぼうとしているのか、その焦点を明確に述べているか否か

国際会議に出席して内容を把握できる能力の推定(海外経験等)

応用生態工学への関心の度合い

参考として応用生態工学会での活動・参加状況

(3) 派遣研究員の選考

2003年度は、学会としての助成総額を30万円とし、適性者数・派遣先等を考慮して、派遣研究員数・個別助成費用を決める。

資格・適性基準を満たすものについては、費用の助成をしなくても「派遣研究員」として認めることが出来るものとする。ただし、当人は辞退できる。

選考にあたっては交流委員会で審査して候補者を選び、理事会において決定する。

### 4) 応募条件：

(1) 関連学会等への参加手続き、旅行手続き(国際航空便、宿泊予約等)は全て派遣研究員が行う。

(2) 関連学会等に現地に参加し、帰国後応用生態工学会にその内容を報告する。報告はニュースレター或いは会誌に掲載する。

(3) 旅行中の事故などについては、当学会は責を負わない。

### 5) 申込み申請書：

派遣希望者は、会員番号、氏名、所属、連絡先(〒・住所・TEL・FAX・E-mail)、年齢、男女、専門分野、希望派遣学会等(開催会議等の名称、主催者名、開催月日、開催国・地名、会議等の目的・内容、現地見学会の有無と内容、参加申し込み期限、参加費、

研究発表をするか否か、案内パンフ等がありましたらそのコピーをお送り下さい) および派遣希望理由(選考基準参照のこと)を、計 A4 二枚以内(書式自由)にまとめ、郵送・FAX・E-mail 等にて事務局に申し込み下さい。

6) 申込期限: 2003年4月30日(水)事務局必着。

7) 派遣決定時期: 2003年5月末(予定)

## 7 北陸ワークショップ開催報告

応用生態工学会事務局

2003年1月25日(土)~26日(日)に、北陸地域で初開催となる現地ワークショップ「北陸の水辺を考える」が開催されました(のべ106名参加)。現地見学会では金沢市内の用水や手取川河口の現状などを視察し、翌日に金沢市中央公民館で92名の参加を得て事例報告と総合討論が行われました。

当日の事例報告のタイトルと講演者は以下のとおりで、さまざまな角度から北陸の水辺の現状について報告が行われました。

〔事例報告〕

- 1) 「手取川七ヶ用水の水草」  
(いしかわ動物園飼育第2課長 佐野 修)
- 2) 「金沢の用水と今後の管理上の課題」  
(金沢市用水・みち筋整備課長 浜谷 晃)
- 3) 「北陸の両生類とその生息環境」  
(石川県両生爬虫類研究会代表 宮崎 光二)
- 4) 「梯川の水辺の現状と国土交通省の取り組み」  
(金沢工事事務所 調査第一課長 畠中 泰彦)
- 5) 「北陸における淡水魚の生息状況と問題点」  
(富山大学教育学部教授 田中 晋)

総合討論では、玉井副会長を座長として北陸の水辺が抱える問題についてさまざまな観点から議論が行われました。河川の自然再生と利水の問題、生態学と工学の観点での自然に対する認識の違い、

雪・渦など北陸の水環境の特性、海と森との関係やそれをつなぐ河川の現状、エコリージョンのような広域的な視点、問題解決に向けての応用生態工学への期待など多様な話題が出されました。また、議論すべきことが多いことから、今後北陸地域では継続してワークショップのような交流の場を持つことが提案されました。



現地見学の様子(手取川河口)



雪のちらつく中金沢市内の用水を見学する参加者



ワークショップの趣旨説明をする玉井副会長



総合討論の様子



熱心に質問する参加者

## 8 メーリングリスト開設のお知らせ

応用生態工学会では、会員相互の交流や会員以外の方とも交流を行うことを目的として、このほどメーリングリスト<ece-ml@ecesj.com>を開設いたしました。学会の行事や関連情報も適宜流す予定ですので、ぜひご参加くださいますようお願いいたします。また、お近くの方にぜひご参加をお勧めくださいますようお願いいたします。

なお、現在応用生態工学会の会員であっても、メーリングリストに自動的にアドレスを登録することは致しませんので、参加ご希望の方は、お手数ですが以下のいずれかの方法で参加登録をお願いいたします。

### 1) ホームページからの申し込み

ホームページの「メーリングリスト」からお申し込みください。事務局へ情報が送られますので、数日中に登録を行います。お急ぎの方は3)の方法で登録してください。

### 2) 管理者(応用生態工学会事務局)宛に参加希望のメールを送信

以下の情報を添付してください。

(1)氏名、(2)ふりがな、(3)所属、(4)メールアドレス(半角文字)、(5)現在のご専門または研究テーマ(20文字以内)

### 3) メールによる自動登録

「subscribe」というコマンドをメール本文に書いて、アドレス <ece-ml-ctl@ecesj.com> へ送って下さい。

メーリングリストへの参加にあたっては、下記のような一般的なエチケットを遵守してください。( <http://www.kt.rim.or.jp/~atsato/beginer/part2/etiquette.html> なども参考にしてください。)

- ・メールはテキスト形式で送り、半角かな・機種依存文字は使用しない。
- ・HTML等の書式付きのメールやファイル添付したメールは不可。
- ・他人への誹謗中傷、営利目的の投稿は不可

- ・携帯電話等へのメール転送はエラーが生じる恐れがありますので避けてください。
- ・ウィルス対策をしっかりと整えましょう。

## 9 事務局報告

やっとニュースレター20号をお届けできました。会員の皆様にはお待たせして申し訳ありません。

事務局長を拝命してやがて1年が過ぎ、2度目の春を迎えようとしています。会員の皆様のご支援・ご協力でなんとかいろいろな行事を進めることができ、本当にあっという間でした。

さて、事務局ではこのニュースレターとともに会員の皆様への広報等の方法として、課題だったメーリングリストも開設することができました。より会員間あるいはそれ以外の方々との交流が進めばと期待しています。

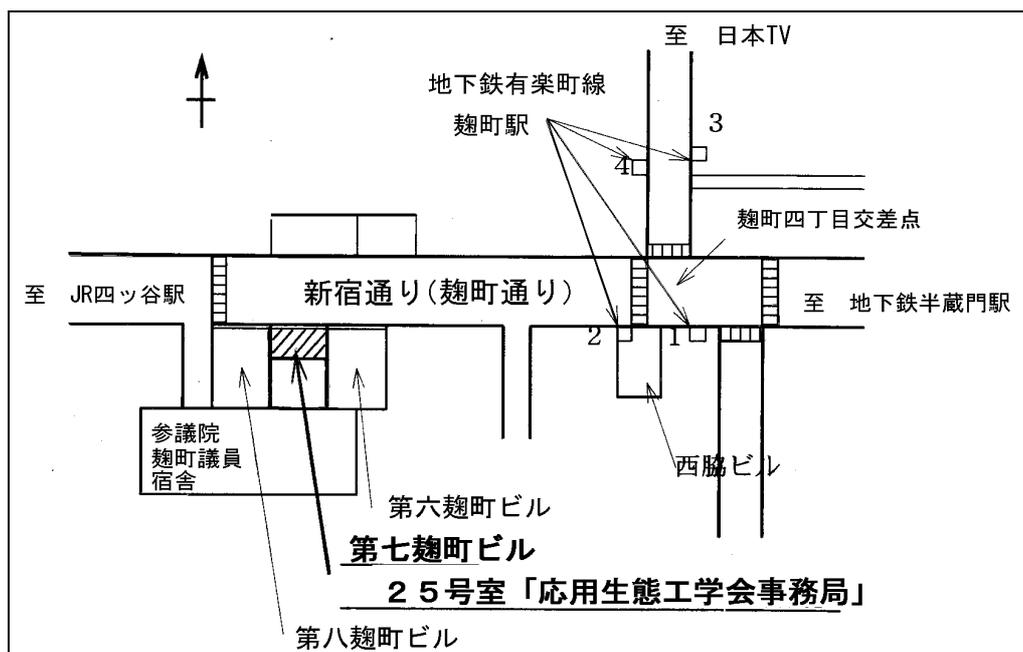
このメーリングリストのほかに、ホームページを重視し、できるだけ速報性のある情報を掲載するよう務めています。また、異動などに伴う所属・住所会員情報の変更ができるよう、連絡フォームも設けています。一度のぞいてみていただき、ぜひ「お気に入り」に加えてくださいますようお願いいたします。

2003年度も、北海道、福岡(大会)、北陸、東北その他の各地での企画が予定されています。会員の皆様にはぜひご参加くださいますようお願いいたします。

### 【研究会活動】(2002年7月~2003年2月)

- |      |  |         |  |
|------|--|---------|--|
| 7.20 | 福岡・シリーズ講習会「水域生態系保全・考え方と技法」第4回「河川生態系保全への工学からのアプローチ」講師：辻本哲郎(名古屋大学) 52名参加 | 9.13    | 会誌「応用生態工学」5巻1号発行   |
| 7.22 | ニュースレターNo.18発行(第6回大会案内、奨励研究募集等)  | 9.13    | 付け 学術研究団体登録  |
| 7.23 | 北陸ワークショップ準備会(金沢)   | 9.17    | 全会員へ第6回大会案内、松江フォーラム案内を発送   |
| 7.26 | 第6回大会実行委員会開催   | 9.17~18 | 国際シンポジウム「川の自然再生」(後援)   |
| 8.10 | 松江フォーラム実行委員会開催(島根県立  | 9.17    | 第6回大会実行委員会開催   |
|      |  | 9.21    | 福岡・シリーズ講習会「水域生態系保全・考え方と技法」第5回「陸上動物の保全-考え方と新しい技法-」講師：傳田正利(土木研究所)        |
|      |  | 10.4    | 第11回会誌編集委員会開催(麹町会議室)   |
|      |  | 10.5    | 第19回理事会開催(科学技術館6F会議室)  |
|      |  | 10.5~6  | 第6回大会開催(東京北の丸科学技術館サイエンスホール) 261名参加                                     |
|      |  | 10.5    | 第6回総会開催(東京北の丸科学技術館サイエンスホール)  |
|      |  | 10.5    | 第20回幹事会開催(科学技術館6F会議室)  |
|      |  | 10.5    | 公開シンポジウム「生態学と工学の連携-総合流域管理に向けて-」オーストリア：ハンス・ピーター・ナハトネーベル教授(ウイーン農業大学)ほか開催 |
|      |  | 10.5~6  | 第6回研究発表会(口頭発表・ポスター発表)開催  |
|      |  | 10.19   | 福岡・シリーズ講習会「水域生態系保全・考え方と技法」第6回「河川の水生昆虫の保全-考え方と技法」講師：谷田一三(大阪府立大学)        |
|      |  | 10.29   | 日本学術会議にて、「日本学術会議の在り方に関する説明会」   |
|      |  | 11.2~3  | パートナーシップ委員会「自然再生事業と市民活動-霞ヶ浦・琵琶湖・宍道湖・中海-」現地及びフォーラム：会場テルサ                |
|      |  | 11.5    | 仙台にて東北地域のシンポジウム等の準備のため関係者と相談。  |
|      |  | 11.16   | 福岡・シリーズ講習会「水域生態系保全・考え方と技法」第7回「河川における魚類の保全」講師：水野信彦(愛媛大学名誉教授)            |
|      |  | 12.5    | 北陸現地ワークショップ実行委員会(金沢市)  |
|      |  | 12.10   | ニュースレターNo.19発行   |

- |              |   |                   |   |
|--------------|---|-------------------|---|
| 12.13        | 交流委員会開催(麹町会議室)  |                   | 者・推薦人届出に関する説明会                                |
| 12.24        | 第20回理事会開催(麹町会議室) 役員選出制度検討委員会開催(麹町会議室)                                 | 2.14              | 平成15年度河川整備基金申請書提出。件名「応用生態工学の国際的ネットワーク構築(その4)」 |
| 2003年(平成15年) |   | 3月                | 会誌「応用生態工学」5巻2号発行予定                            |
| 1.16         | 「第4回東京湾海洋環境シンポジウム」(共催)開催  | 3月                | 第3回世界水フォーラム                                   |
| 1.22         | 仙台にて東北地域のシンポジウム等の準備のため関係者と相談。   | 3.31              | 2002年度終了                                      |
| 1.25~26      | 応用生態工学会北陸現地ワークショップ(北陸地域で初開催)「北陸の水辺を考える」(金沢市中央公民館、2003年1月25~26日)106名参加 |                   |   |
| 2.7          | 公開シンポジウム『長良川河口堰の影響に関するモニタリング評価 応用生態工学特集を読む-』(名古屋市市桜華会館)               | [2002年2月28日現在会員数] |   |
|              |   | 正(学生)会員           | 1,130名  |
|              |   | 賛助会員              | 56法人  |
| 2.14         | 日本学術会議にて、「第19期の会員候補   |                   |   |



## 応用生態工学会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル(2F 25号室)

TEL. 03-5216-8401 FAX. 03-5216-8520

E-mail: see @ blue.ocn.ne.jp ホームページ: <http://www.ecesj.com/>

[地下鉄有楽町線麹町駅2番出口徒歩3分]

[地下鉄半蔵門線半蔵門駅徒歩7分]

[JR中央線四ツ谷駅徒歩10分]